

氏は本誌16号で14号に続いて熱心に質問されている。しかしその内容は的外れの主張に感じられるので、思うところを書いてみることにした。まずは氏ご本人の弱点を指摘したい。その問題点は「夷守の論考」にあると思う。なお筆者は九州説を支持している。

『魏志倭人伝』(以下『魏志』と略す)の「夷守」の意味と、『日本書紀』の「ヒナモリ」の意味が同じであると考えるのがおかしい。「遠くにあつて国を守るという意味」と述べられているが、それは『日本書紀』による解釈(下線部)であつて『魏志』の解釈ではない。そもそも大平氏が『魏志』にどれだけの信を置いて論拠とされているのかが疑わしいので、『魏志』「夷守」に関する学術的論争は不毛であると思う。また例えば鳥越憲三郎氏のように「南を東と書き換えれば解決する」論(注1)はもはや許されないし、大和説が逆に破綻していることは下記の内容で明白ではなからうか。

先日(R6.3.17)のNHK「最新古代史ミステリー」では、邪馬台国の「南の狗奴国」が「東の蛮族の国」として(差別的に)描かれていて大和説論者のNHKを抱き込んだ「謀略」が垣間見えて怒りを感じたのは筆者一人ではないだろう。『魏志』には邪馬台国の男子も「黥面・文身」と記されているのだから公共の電波を使ったあのような内容は許せないと思う。そこで「本誌16号・3つの最大の弱点」については「本誌14号」の諸疑問全般に対する反論で答えることにしたいと思う。

1. まず『魏志』の距離と日数は、実際に踏破し計測したのでは無い事は明白であるから矛盾があるのは当然で、その矛盾をついても永遠に解説は出来ない。従つて「地政学上の状況証拠」などによる(後半に述べる)解釈が最適である事は歴然である。「北九州の東方向の辺りにある」と成れば、方角も正確には「北東」でも「東の方」と誤解されてもそれが人間の感覚である。その上「現在の風景」をみて「過去の風景」を語ることは過去を見誤ることは確実で、甘木駅前の石碑はその周辺が「邪馬台国の中心」だったという事ではなくその設置理由は朝倉市内にあると言つた「宣伝」の意味なのです。

そこで邪馬台国の人口論について述べると「人口7万戸」の大国を支える穀倉地帯が筑紫平野なので平塚川添遺跡では大規模な穀物倉庫群が確認されている。よつて一戸五人家族(中国の平均家族と同じ)と計算しても7万戸×5人で35万人、広大な筑紫平野の広範囲な湿地帯の状況とを勘案すれば、半農、半漁など自然採取経済と栽培農業とが繋がつたクニであれば人口の維持と増大は可能と判断できる。因みにこの時代の筑後川上流域の自然環境は、中国大陸・西遼河の沖積平原(注2)や黄河下流域に酷似していると筆者は考えていて、中国同様に100万人単位の人口を維持できる環境下にあつたと推定している。従つて奈良時代中期頃までは「下高橋官衙遺跡」のような大規模な「西の正倉院」穀物倉庫群が建設されるなど、太宰府は「西京」と言われて繁栄したが、将来的には凋落して行く。よつて1600年代の黒田藩の初期農政を知ると人口減の原因をある程度推測ができるので、奈良時代の人口と弥生時代の人口を比較するとするならばデータ数字に約500年間の開きがあるので、その違いの歴史的な原因を織り込んだ主張でないと適切ではないと思う。また後半で触れるが鬼頭氏の「縄文時代の西日本地域のデータ」は信頼性に欠ける。

2. 次に「三雲南小路遺跡」と「西新町遺跡」については、福岡市立博物館・文化財調査報告書によれば、「卑弥呼の時代の土器としてよく知られている西新式土器」が出土する一方で、「古墳時代の人々が住んでいたと考えられる住居の跡が、20軒近く見つかつて」いるが、「畿内から多くの役人や従者たち」が派遣され「駐在生活」をしたとする記録は何処にもないとされているので土器はこのケースでは物証とは成らない。何故なら土器を製作した人、持ち込んだ人、そして利用した人が特定できないからである。それは奈良・纏向遺跡についても言える。年代のハッキリした地層からその年代ごとに重なつて出土した土器のみが時代の特定資格を有すると言えるのでなからうか。

そこで纏向遺跡の出土土器について考察すると、奈良盆地の征服者の居住する全ての建物と、全ての巨大古墳の築造、建設に「誰」が従事したのかと言うことが全く語られていない。推測するに主に尾張・三河地方の土器だとすれば、その地方から徴発された民衆によって築かれたという事を証明しているわけだから、労働=賦役はどんな「民衆」が何を食べ、何を報酬として貰つたのかという疑問がわく。タダ働きだとしたら奴隷の身分となる。人民支配のシステムが「鬼道」なのは卑弥呼であつたが、纏向遺跡、箸墓古墳を造らせた支配者は「鬼道」を使つて人民動員を行つた「支配のシステム」なのだろうか、と考えるとそれは邪馬台国とは違つた別の「政治的権力集団」を想定しないとイケないのではなからうか。

昭和六十二年十月の NHK テレビでは箸墓古墳の建設費(注3)を試算していて、それによると総工費二百十六億円、延べ人員百七十万人、建設期間約12年間としている。このような情景を想像してみると九州とは全く無関係に新たな秩序が奈良に創られていることを物語っており「狗奴国との交流が途絶え」「戦闘態勢」というシナリオは別の世界の、そして筋違いで意味不明と感じる。纏向遺跡からは九州とは別の奈良王朝という権力組織が浮かんでくるのである。更に大林組の大山古墳(伝仁徳陵)の建設見積もりも同様に詳しくその内容が計算されていて、締めくくりの言葉として「(巨大古墳の造営には)総合的な経済力に加えて各種産業力・技術力が必要で、更には権力者の身勝手ではなく人民を駆り立てる「動機」も必要と考えられる。」としていて、ほとんど語られていない大規模な「家内制手工業」の存在を窺わせるのである。又纏向遺跡から九州産の土器が見つかっていないとなれば、九州と奈良とは地勢上の断絶があったということであり、地勢上の断絶とはどういうことかを述べる必要がある(後半に詳述)。

3. 次に漢時代の銅鏡は特に(東方の)前方後円墳から発見されるが、本誌15号に故大塚初重氏がご指摘のように後漢鏡をして邪馬台国時代の対外交流というのであれば後漢鏡が九州ルートである必要はなく独自に日本海ルートから仕入をする政治的集団があっても不思議ではないと考えられる。銅鏡で邪馬台国を語るとすれば古墳からのみ出土していることも問題で、権力の象徴なら「何故埋めるのか」残された家族の跡取りはどうなるのか、そして「(西方では)ほとんどが破鏡」なのはどうかの説明無しに「(全国に)分配する」理由を説明出来ないはずである。こういった問いかけは意味不明で新しい仮説が必要であると思う。

以上のことから奈良における古墳とそれが創り出している奈良盆地の情景は『魏志』の世界とは全く異質な世界が創造されているという事実を確認するならば、北部九州一帯に邪馬台国、遙か(東の)近畿圏にヤマト王権の前身の何らかの権力組織があったと推定出来る。その様な権力主体が関裕二氏、伴とし子氏の「タニハ説」=大丹波王国に繋がるのではないだろうか。京都府京丹後市に弥生時代後期末の墳丘墓・赤坂今井墳墓があり、沼津市高尾山古墳を知られば知るほど、古代日本列島には九州の邪馬台国と近畿圏の大丹波王国といったクニが「並立」して、しかし具体的な交流のない政治勢力があったと想定することは出来るのである。そうすると『魏志』の卑弥呼が魏へ使者を送る歴史的意味が「東にある巨大な勢力」に対抗するためだったという「新たな解釈」と「対狗奴国戦争の原因」も、そして『日本書紀』景行帝の九州に於ける各種伝承も解説できるのではないかと、想像が広がることを実感する。いずれにしろ近年の発掘では日本海を窓口にして「鉄」を操る強力な「クニ」が在ったと想定されていて、銅鏡が「楽浪・帯方郡から畿内へ直接」もたらされたという流れは確実に推測できる。

最期に「投馬国」について、そして「東西の断絶」について述べてみたい。

まず「海難の名所」の第一は「(a) 関門海峡」であり、第二は「(b) 来島海峡(芸予海峡)」で、明石海峡は次の次の第四位と国交省(注4)が公表している。この事は(a)(b)を通過できたその当時の船の構造と能力が大いに問題であるが(注5)、何とか(a)を通過できたと仮定して周防灘を南下しても東に舵を切って瀬戸内海方向へ進むことは大変困難を伴うのである。つまり多くの渡航者にとって関門海峡は太古の昔から東西を分断する難所として知られており、多くの渡航者が流されて土佐に漂着すると言うことが最新のDNA解析と核ゲノムの都道府県別SNP解析(注6)を見ると(筆者の思い込みかも知れないが別の機会に解説予定)推測されるのである。北部九州一帯の邪馬台国の勢力圏を避けた渡航者の多くが関門海峡を抜けて東に行けずに流されて漂流するという事実は、それを逆に利用した例がある。後年「土佐日記」の紀貫之は四国の西まで来て松山沖から引き潮に乗って、つまり四国を西回りで太平洋に出て北上し土佐に赴任しているのである。航路と潮流の知識があれば東の紀淡海峡を交通するより安全だということである。

しかしながらこのような潮流の難所(a)(b)を魏の使者が通過して航行する事はあり得ないと考えられる。さらに当時の風景を想像出来る事件がある。それは約7300年前の「鬼界カルデラ大噴火(注7)」による大津波と浮遊軽石の大襲来である。大津波と膨大な軽石が豊予海峡を通過して周防灘の山口県と九州東岸全域に押し寄せて、兩岸のあらゆる物に甚大な損害を与え、多くの縄文人も死滅したと想像されるのである。その結果関門海峡を挟んで地勢上の分断が数千年に亘って続いたと想定され、人跡未踏の土地=極相林となって縄文人が住まなくなり、後の弥生人も住まないために邪馬台国の時代になっても過疎地域(注8)という風景と想定されるのである。そして物証はある。その一例が淡水魚「バラタナゴ(注9)」である。近畿圏の琵琶湖、淀川水系と、北部九州の御笠川水系、筑後川水系に生息しているが山口県と広島県の水系の河川には生息していないのである。つまりこの2県を挟んで東西が生物地理

学上、地勢学上分断しているとハッキリ判るのである。

そもそも鬼頭宏氏の人口論では四国・山陽地方で「早期・前期の縄文人は約 5,000 人(注 10)」とされており、『魏志』の「投馬国五万余戸(25 万人)」になるには「約 50 倍」の人口増を必要とする。これから判断しても『日本書紀』にみる吉備国に「後付け」で投馬国を持ってきたことは明白と言える。従って投馬国は地政学上から九州となり、その場所は(水行 20 日の先にある)「遠賀川上流域」と想定されるのである。その根拠についてはオリジナル手法を持って証明に挑戦しているので、次回に投稿することになっている。具体的には生物地理学という学問によるもので、その歴史的巨頭はチャールズ・ダーウィンである。

ご意見を心よりお待ちしております。

## 注記

(注 1)『倭人・倭国伝全釈』鳥越憲三郎 角川ソフィア文庫 令和 2 年 7 月。

『延喜式』を駆使した解説となっていて「南を東と訂正して読むことで事足りる」と断言している。

(注 2)『人類の起源』篠田謙一 中公新書 p.217 図 6-6。蛋白質は淡水魚で摂取して、人口増には「雑穀栽培農業」が必須と考えられる。

(注 3)大林組の大山古墳(伝仁徳陵)の建設見積もり。大林組広報誌『季刊大林・第二十号』「王陵」大林組プロジェクトチーム 一九八五年。

大山古墳(仁徳天皇陵)を、その当時の道具、人夫、などを想定して現代に造成するとした場合のシミュレーションを計算している。「古代の土木工事で、使用する道具は先端に鉄製の刃を付けたスキにクワ、土砂運搬のためのモッコくらいであったとし、「古墳全体に敷かれた葺石は、斜面保護のために有効である」ので「斜面を風雨による崩壊から防ぎ、植物の生育を妨げる」。そして「現場で働く人びとのために、膨大な数のスキやクワなどを作る人員、さらに管理や再生産のためには、集団によるシステムも必要」で、更に「毎日食事を用意する」必要があるので、土を掘り、運ぶなどの「陵を造る直接の労働力とは別個にほぼ同数の要員が必要である」と試算している。

(注 4)運輸安全委員会事務局 門司事務所 「海上交通の難所 関門海峡」

<https://www.mlit.go.jp/jtsb/bunseki-kankoubutu/localanalysis/06moji/20170317mjanalysis.pdf>

(注 5)『邪馬台国新聞』(14 号)2022 年 4 月 25 日発行号。宝賀寿男「古代の瀬戸内海航行の可能性」。長野正孝氏の『古代史の謎は海路で解ける』を批判し「雄略天皇の浚渫工事は考えられない」とある。

(注 6)『人類の起源』篠田謙一 中公新書 p.198 図 6-1

(注 7)『火山灰は語る』町田洋 蒼樹書房 1977 年。下記災害に比べても海底火山噴火は、桁違いに大規模であると想像される。・「福徳岡ノ場の海底火山」「噴火で生まれた大量の軽石が千数百キロ離れた沖縄、奄美地方に漂着して深刻な被害が出ている。」・「未曾有の大津波」東日本大震災 2011 年 3 月。各地を襲った津波の高さは、福島県相馬では 9.3m 以上。遡上高(陸地の斜面を駆け上がった津波の高さ)では、全国津波合同調査グループによると、国内観測史上最大となる 40.5m が観測された。

(注 8)『魏志倭人伝』「又渡一海千餘里至末盧國有四千餘戸濱山海居草木茂盛行不見前人好捕魚鰻水無深淺 皆沉没取之」から解することは、人が居住していない大地は荒れ果てて、結果として人間の居住地は海岸線となるのは自然の成り行きで、海に潜って魚取りが仕事となる。

(注 9)『淡水魚』東海大学出版会 1987 年 分布図。分断を証明する淡水魚は数種類に及ぶ。

現代の分布は、**中国大陸全域、朝鮮半島西部、北部九州一帯、近畿圏(フォッサマグナ以西、中央構造線以北)**。

(注 10)小山修三『縄文学への道』(p.109)のデータの引き写しで、根拠と解説が極めて曖昧である。(筆者評)



2024.4.10 完